

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 30 年 5 月 29 日現在

機関番号：14101

研究種目：基盤研究(B) (一般)

研究期間：2014～2017

課題番号：26284008

研究課題名(和文) 密教思想と他の仏教思想との関係性～ヴィクラマシーラ寺院の学僧の著作群を中心に～

研究課題名(英文) On the Relationship between Tantric and Non-tantric Doctrines in the Works of the Monk-Scholars of the Vikramasila Monastery

研究代表者

久間 泰賢 (KYUMA, Taiken)

三重大学・人文学部・准教授

研究者番号：60324498

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 13,600,000円

研究成果の概要(和文)：本研究の成果は、以下の3点に集約される。(1) Indo-Tibetan Lexical Resource (Hamburg 大学)と連携し、ヴィクラマシーラ寺院に関するデータベースを作成・拡充した。(2) 同寺院の代表的な学僧の著作群における密教思想と他の仏教思想との関係性を検討した。(3) 上記の2つの作業に基づき、密教思想とそれ以外の仏教思想との関係性をめぐる同寺院の学僧たちの思想的傾向を考察した。このうち(2)と(3)の成果は、国際学術誌 Journal of International Association of Buddhist Studies (vol. 40)で公表した。

研究成果の概要(英文)：The results of this research can be summarized as follows: (1) In collaboration with the Indo-Tibetan Lexical Resource (Universitaet Hamburg), a database was made for texts etc. related to the Vikramasila monastery. (2) Each of the research members worked on the relationship between tantric and non-tantric doctrines (such as Yogacara, Madhyamaka, and Tathagatagarbha) explained in the works of the monk-scholars of the Vikramasila monastery. (3) Based on (1) and (2), we also discussed the existence of a community of thought regarding the relationship between tantric and non-tantric doctrines. The outcomes of (2) and (3) have been published in a special volume (vol. 40) of the Journal of International Association of Buddhist Studies.

研究分野：インド仏教思想

キーワード：後期インド仏教 ヴィクラマシーラ寺院 密教 顕教

## 1. 研究開始当初の背景

後期インド仏教は密教思想と他の仏教思想とを総合するかたちで成立しているが、その両者は、従来の仏教研究においては国内外を問わず別個の研究対象として独立して扱われる傾向があった。こうした傾向が存在してきた原因としては、密教思想の術語や内容の難解さが専門家以外の関与を阻んできたという事情を挙げることができる。しかし、後期インド仏教の思想体系において、密教思想と他の仏教思想とがいかに関係づけられているかという点を明確にすることは、インド仏教史を精確に記述しようとする者にとって不可欠な営みである。以上の問題意識から出発した研究代表者は、後期インド仏教（あるいはインド密教）の一大拠点とされる Vikramaśīla 寺院に焦点を絞り、「ヴィクラマシーラ寺院の学僧の著作群における密教思想の位置づけに関する総合的研究」（基盤研究 (B) 一般、2010-2013 年度）という研究課題のもとで、国内外の仏教研究者との共同研究を推進してきた。成果の詳細は、当該科研の研究成果報告書に記載した通りである。

今回の研究計画は、上記の科研の成果を踏まえつつ、従来とは異なる新たな問題意識に基づいて遂行するものである。従来の問題意識は、「なぜ密教思想は他の仏教思想よりも優れているとされるのか」という点を主軸としたものであった。それに対して、今回の研究計画では、より一層解像度を高めた問題意識を設定する。すなわち、密教思想は一般に他の仏教思想よりも優れているとされるが、それと同時に、後者が前者の内に、いわば「織り込まれている」こともまた事実なのである。密教思想において、「中観思想」「唯識思想」「如来蔵思想」「認識論・論理学 (pramāṇa) の枠組み」などの主要なファクターが、どのように採り入れられ、どのように用いられ、どのような変容を蒙ったのかという問題に焦点を当てることで、密教思想とそれ以外の仏教思想とがいかなる関係を形成しているのかという点を明らかにすることが、今回の研究計画における重要な課題である。

## 2. 研究の目的

以上の学術的背景を前提として、本研究が目的とするのは、後期インド仏教における密教思想が、他の仏教思想をどのように受容したのかという問題を、特に 10 世紀以降の Vikramaśīla 寺院の学僧の著作群に焦点を絞って総合的・多角的に考察することである。研究期間内に達成すべき具体的目標は、以下の通りである。

(1) 基礎作業として、当時の同寺院における仏教文献の使用状況について調査する。これについては、すでに 2010-2013 年度の基盤研究 (B) の際にデータベースを蓄積しているが、今回はそのデータベースをさらに拡充すると同時に、効果的な利用体制を構築することを目指す。

(2) データベース作成と平行・連携するかたちで、同寺院の代表的学僧の著作における「密教思想における他の仏教思想の位置づけ」について、研究メンバーが、これまでの各自の研究を踏まえた個別課題を設定して検討する。

(3) 上記の作業結果を踏まえつつ、同寺院の学僧たちに共通する思想的傾向について、総合的・多角的に考察する。その際、同寺院に関連するチベット仏教の伝承も参考資料とする。

## 3. 研究の方法

研究目的に記した具体的目標について、それぞれ次のような方法で達成を図る。

(1) 本研究の基礎作業として、サンスクリット写本コロフォン・チベット語翻訳文献コロフォンなどを資料としつつ、Vikramaśīla 寺院における仏教文献の使用状況についてのデータベースを作成する。併せて、そのデータベースを有効活用できるシステムを構築する。

(2) データベース作成と平行・連携するかたちで、同寺院の代表的な学僧の著作に見られる「密教思想における他の仏教思想の位置づけ」について、各研究者が個別課題を立てて検討する。また、その成果を国内研究会・国際学会パネルにおいて随時報告し、研究計画へのフィードバックを行う。

(3) 「密教思想における他の仏教思想の位置づけ」をめぐる同寺院の全体的傾向について、(1) と (2) の作業結果を基に、最終年度の国内研究会・国際学会パネルで総合的・多角的に考察する。

## 4. 研究成果

### (1) プロジェクト全体としての研究成果

上述の研究目的・研究方法に基づき、研究期間内に研究メンバーが推進した研究活動の全体的な成果は、以下の通りである。このうち①は研究方法の (1) に、②～④は研究方法の (2) と (3) に対応する。

①データベースの作成・拡充：各研究メンバーが、同寺院の学僧の著作とそこにおける引

用文献、同寺院に関連する言及を含む写本の  
コロフォンに加えて、同寺院に関連する思想家  
や他の寺院などについても、項目別にデータ  
ベースを作成・拡充した。各項目の入力に際  
しては、ハンブルク大学のデータベースプロ  
ジェクト Indo-Tibetan Lexical Resource (責  
任者：Dorji WANGCHUK 教授、略称 ITLR)  
をプラットフォームとして用いた。多くの重  
要な項目が、スタッフの査読を経て公開され  
ている (<http://www.itlr.net/test.php?md=view>)。  
②研究者間の交流促進：国内研究会(年2~3  
回)に海外の研究者を招聘するとともに、国  
際 workshop (2016年9月、ナポリ東洋大学、  
イタリア)を開催した。それによって、密教  
研究者とそれ以外の仏教思想の研究者との  
国際的学術交流を促進した。とりわけ、ナ  
ポリ東洋大学(イタリア)、ハンブルク大学(ド  
イツ)、オックスフォード大学(連合王国)、  
フランス極東学院(フランス)、マヒドン大  
学(タイ)の研究者との間で、活発な交流が  
行われた。また、研究期間中は、英文メー  
リングリストを通じて国内外の研究者間の連  
絡を密にした。  
③国外への成果発信：研究メンバーは、海  
外の学会や workshop に積極的に参加するこ  
とで、各自の成果を発信した。特に、国際仏  
教学会では本研究のパネルを2回(2014年8  
月、2017年8月)にわたって開催したことは、本  
研究の活動内容を国外に広く周知するとい  
う点において、極めて有意義であった。  
④写本研究の推進：上述の②と③を通じて、  
複数の海外研究協力者とともに、Vikramaśīla  
寺院と関わりを有する学僧による、密教思想  
とそれ以外の仏教思想との関係性を扱った  
著作群のサンスクリット写本研究を進めた。  
特筆すべき文献としては、Samantabhadra の  
Sāramañjarī (オックスフォード大学の  
Péter-Dániel SZÁNTÓ 氏が校訂中)、  
Ratnarakṣita の Padminī (研究分担者の加納・  
倉西・種村が共同で校訂中)、Sahajavajra の  
Sthitisamāsa (智山伝法院の松本恒爾氏が校訂  
中、同氏については国内研究会に複数回招  
聘して講読会を依頼した)が挙げられる。こ  
れらの文献には、後期インド仏教における密  
教思想とそれ以外の仏教思想との関係性を示  
唆する記述が豊富に含まれている。とりわけ、  
密教思想の文脈において、7世紀以降に発達  
した認識論・論理学の枠組みが頻りに用いら  
れていることは、大変興味深い。以上の事柄  
は、後期インド仏教の寺院において複数の仏  
教思想がどのように関係づけられて学修さ  
れていたのかという問題を考える際に重要な  
手がかりとなる。そのほか、Śrībhānu の  
Amṛtadhārā (Vajrāmṛtatāntṛa に対する註  
釈、ナポリ東洋大学の Francesco SFERRA 教  
授が校訂中)や Ānandagarbha の Sarvavajrodayā (研

究分担者の種村とフランス極東学院の Arlo  
GRIFFITHS 教授が中心となって校訂中)など  
の重要な密教文献の講読も行った。以上の文  
献の校訂・公刊は、今後の当該分野の研究を  
大幅に進展させるであろう。

なお、本研究の研究期間中に、本研究と内  
容的に関連する「ヴィクラマシーラ寺院の学  
僧の著作群における密教思想の位置づけに  
関する総合的研究」(基盤研究(B)一般、  
2010-2013年度)の研究成果を、東京大学東  
洋文化研究所の学術雑誌『東洋文化 (Oriental  
Culture)』の特集号(96号、2016年3月)と  
して公刊した。また、本研究の成果は、当該  
分野の国際学術誌 *Journal of International  
Association of Buddhist Studies* (vol. 40) にも収  
められている。

## (2) 個別的な研究成果

次に、研究代表者・研究分担者による個別  
的な研究成果の概要について、以下に順を追  
って記述する。これは、主として研究方法の  
(2)と(3)に対応するものである。

- ①久間(研究代表者)：『東洋文化 (Oriental  
Culture)』の特集号の査読・編集作業を進め  
るとともに、同号の Preface を執筆した。また、  
国際仏教学会において本研究のパネルを2回  
組織した。さらに、*Journal of International  
Association of Buddhist Studies* (vol. 40) の  
guest editor として複数の英語論文の査読・編  
集作業を行った。そのほか、研究会などの全  
体的な取りまとめを行うと同時に、科研デー  
タベース作成に際して ITLR と連携する方法  
の検討を進めた。
- ②加納(研究分担者)：倉西・種村と共同で、  
Ratnarakṣita の Padminī 第1章傍論部のサ  
ンスクリットテキスト校訂を発表した。また、  
Jñānaśrīmitra 作『有相唯識論証』(『宝性論』  
を引用・注解した箇所)を扱った単著を刊行  
し、11~13世紀における如来蔵思想と密教思  
想との関係を論じた。さらに Vikramaśīla 寺  
院の学僧 Abhayākaragupta の *Munimatālaṅkāra*  
(世俗諦の定義をめぐる論争に関する部分)  
を精読し、校訂と訳注を雑誌論文に発表した。  
これら一連の作業を通じて、11~13世紀頃に  
同寺院で学ばれていた顕教と密教の実態、そ  
して両者の関係性を明らかにした。
- ③倉西(研究分担者)：加納・種村と共同で、  
Ratnarakṣita の Padminī 第13章の部分校訂テ  
キストを作成した。また、同書第9章の校訂  
テキスト・英文訳註(海外研究協力者の  
Junglan BANG 氏との共著)を出版した。
- ④種村(研究分担者)：Abhayākaragupta や  
Ratnarakṣita などの著作を読解することで、仏

教教理を通じて密教実践がどのように正当化されるのかという問題を検討した。その結果、密教がその実践を正当化するには『大乘莊嚴經論』のような「大乘仏説論」を説く唯識論書が援用されていることを明らかにした。また、その成果の一端を国際仏教学会で発表した。そのほか、加納・倉西と共同で *Padmini* における成仏理論と生起次第の有効性の議論を検討し、成果の一部を公表した。

⑤ 苜米地 (研究分担者) : ITLR との協力体制を構築し、ITLR のデータベースを用いた *Vikramaśīla* 寺院関連項目の入力・編集を統括した。また、*Bhavyakīrti* の浩瀚な著作『灯作明 (*Pradīpoddhyotana*) 再註』の内容分析と TEI マークアップ作業を遂行した。さらに、*Abhayākaragupta* の *Āmnāyamañjarī* の TEI 準拠テキストマークアップをテーマとする研究会を開催し、海外の研究者から助言を受けた。同書については、新規に得られたサンスクリット・チベット語バイリンガル写本に基づくサンスクリットテキストの電子化を行い、その作業状況について研究発表を行った。また、同書所引文献の調査も行い、その成果の一部を公刊した。

⑥ 宮崎 (研究分担者) : *Atiśa* の密教思想における中観思想・如来蔵思想の位置づけを調査した。また、*Atiśa* の顕教の著作において、密教との関連が特に強いと考えられる神通の概念に着目し、その源流と意義を解明するために大乘の経典・論書を調査した。その成果については国際仏教学会で発表した。

⑦ 望月 (研究分担者) : *Atiśa* に帰せられる著作の解読を中心に作業を進めた。特に、*Atiśa* の密教文献を調査することで、彼がチベットに伝えた儀軌の一部が明らかになった。また、*Atiśa* の『般若心経釈』と同経典に対する他の註釈書との間の影響関係を検討するとともに、*Vikramaśīla* 寺院に関わりのある学僧 *Advayavajra* に対する *Atiśa* の態度を解明した。さらに、*Atiśa* の著作と伝記資料から、彼の師である *Vikramaśīla* 寺院の学僧 *Ratnākaraśānti* と *Atiśa* との関係についても考察した。

### (3) 研究成果についての所見

以下は、研究成果についての所見である。まず、研究方法の (1) については、ハンブルク大学の ITLR データベースを使用して、*Vikramaśīla* 寺院に関連する項目 (文献、学僧、他の寺院など) を相当数入力できたことは、成果の発信と国際的波及性という点で特筆に値する。今後も機会があれば、データベースの分量をさらに増やすとともに、質の向上に努めていきたいと考えている。

研究方法の (2) と (3) についても、研究メンバーの協力を得て、雑誌論文や学会発

表など、多くの研究業績が得られたと確信している。とりわけ、当該分野の国際学術誌に論文集を載せることができた点は、大きな成果とみなしてよいであろう。

そのほか、本研究の重要な成果として挙げられるのは、国内外の密教研究者とそれ以外の仏教思想の研究者との間の学術的交流を、実質的なかたちで遂行できたことである。年 2~3 回開催の科研 workshop や研究会、関連学会への出席を通じた活発な学術交流の結果、本研究は「*Vikrama* 科研」という略称のもとに当該分野で広く認知されることになったと自負している。また、国内外の研究者の学術交流に際しては、科研英文メーリングリストが大きな役割を果たしたことも付け加えておきたい。本研究を起点として、国内外の密教研究、そして仏教研究そのものが今後さらに進展してゆくことを祈念している。

### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 67 件)

- ① 種村隆元、加納和雄、倉西憲一、*Ratnarakṣita* 著 *Padmini* 第 1 章傍論 : Preliminary Edition および註、『川崎大師教学研究紀要』、査読有、3 号、2018、(25)–(58)
- ② Kaie MOCHIZUKI、On the Works on the Ritual of Oblation Attributed to *Dīpaṃkaraśrījñāna*、『印度学仏教学研究』、査読有、66–3 号、2018、163–170
- ③ 加納和雄、ヴィクラマシーラ寺の六賢門をめぐる史料とその問題点、『印度学仏教学研究』、査読有、65–2 号、2017、108–114
- ④ 種村隆元、加納和雄、倉西憲一、*Ratnarakṣita* 著 *Padmini* 第 13 章傍論前半 : Preliminary Edition および註、『川崎大師教学研究紀要』、査読有、2 号、2017、(1)–(34)
- ⑤ 宮崎泉、*Atiśa* の如来蔵思想—その典拠と大中一、『印度学仏教学研究』、査読有、65–2 号、2017、(174)–(181)
- ⑥ 苜米地等流、*Abhayākaragupta* 作 *Āmnāyamañjarī* 所引文献—新出梵文資料・第 1~4 章より一、『大正大学総合佛教学研究年報』、査読有、39 号、2017、(99)–(136)
- ⑦ Kazuo KANO、*Jñānaśrīmitra* on the *Ratnagotravibhāga*, *Oriental Culture* (『東洋文化』)、査読無、96 号、2016、7–48
- ⑧ Kenichi KURANISHI、A Study on Scholarly Activities in the Last Period of the *Vikramaśīla* Monastery: Quotations in Ra-

- tnaraksita's *Padminī*, *Oriental Culture* (『東洋文化』)、査読無、96号、2016、49–61
- ⑨ Toru TOMABECHI, Bhavyakīrti's Sub-commentary on the *Pradīpoddyotana* as a Doxography: Some Preliminary Remarks, *Oriental Culture* (『東洋文化』)、査読無、96号、2016、81–94
- ⑩ Kaie MOCHIZUKI, Dīpaṃkaraśrījñāna's Activities at the Vikramaśīla Monastery in Relation with the Pāla Dynasty, *Oriental Culture* (『東洋文化』)、査読無、96号、2016、63–80

[学会発表] (計 68 件)

- ① Taiken KYUMA (Panel Convener & Discussant), Panel: Reconstructing the History of Late Indian Buddhism (Part III) — Relationship between Tantric and Non-tantric Doctrines —, XVIIIth Congress of International Association of Buddhist Studies, 2017
- ② Ryugen TANEMURA, Kazuo KANO, and Kenichi KURANISHI, Ratnaraksita on the Practice of Meditation: Its Validity and Fruit in Tantric Buddhism, XVIIIth Congress of International Association of Buddhist Studies, 2017
- ③ Toru TOMABECHI, TEI Markup of Abhayākaragupta's *Āmnāyamañjarī*: An Attempt to Create an "Open Research Note" for the Study of Late Indian Buddhism, The Future of Digital Texts in South Asian Studies: A SARIT Workshop, 2017
- ④ Izumi MIYAZAKI, The Abhijñāś and Preaching the Dharma in the Bodhimārga-dīpapañjikā, XVIIIth Congress of International Association of Buddhist Studies, 2017
- ⑤ Kazuo KANO, Reconsidering the Origin(s) of the Buddha-nature Teaching, 復旦大学招待講演、2016
- ⑥ Kaie MOCHIZUKI, On the Tantric Works Attributed to Aśvaghōṣa with Reference to Dīpaṃkaraśrījñāna, Inner Asian and Altaic Studies Lecture Series, 2016
- ⑦ Taiken KYUMA, Locating the Madhyamaka Doctrine in Tantric Buddhism, XVIIth Congress of International Association of Buddhist Studies, 2014
- ⑧ Ryugen TANEMURA, Abhayākaragupta on Tantric Practice, XVIIth Congress of International Association of Buddhist Studies, 2014
- ⑨ Toru TOMABECHI, Bhavyakīrti on Tantric Meditation and Means of Cognition, XVIIth Congress of International Association of Buddhist Studies, 2014

- ⑩ Kaie MOCHIZUKI, On the Tantric Works of Aśvaghōṣa Cited in Dīpaṃkaraśrījñāna's Works, XVIIth Congress of International Association of Buddhist Studies, 2014

[図書] (計 10 件)

- ① 加納和雄、倉西憲一、『仏教史研究ハンドブック』(法蔵館)、2017、410 (加納：20–21、32–33、倉西：22–23)
- ② Kazuo KANO, *Buddha-nature and Emptiness: rNgog Blo-ltan-shes-rab and a Transmission of the Ratnagotravibhāga from India to Tibet* (Vienna: Vienna Series for Tibetan and Buddhist Studies), 2016、488
- ③ Ryugen TANEMURA, Kazuo KANO, *Brill's Encyclopedia of Buddhism (Volume 1; Literature and Languages)*, 2015、1065 (TANEMURA: 326–333, KANO: 373–381, 382–389)
- ④ 望月海慧、『全訳アティシヤ菩提道灯論』(起心書房)、2015、374
- ⑤ 久間泰賢、『仏教の事典』(朝倉書店)、2014、561 (196–206)

[その他]

ホームページ等：

加納 (研究分担者) 業績一覧

<https://koyasan-u.academia.edu/KazuoKano>

倉西 (研究分担者) 業績一覧

<https://tais.academia.edu/KenichiKuranishi>

種村 (研究分担者) 業績一覧

<https://tais.academia.edu/RyugenTanemura>

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

久間 泰賢 (KYUMA, Taiken)

三重大学・人文学部・准教授

研究者番号：6 0 3 2 4 4 9 8

### (2) 研究分担者

加納 和雄 (KANO, Kazuo)

駒澤大学・文学部・講師

研究者番号：0 0 5 0 9 5 2 3

倉西 憲一 (KURANISHI, Kenichi)

大正大学・仏教学部・非常勤講師

研究者番号：9 0 5 7 3 7 0 9

種村 隆元 (TANEMURA, Ryugen)

大正大学・仏教学部・准教授

研究者番号：9 0 4 0 1 1 5 8

苫米地 等流 (TOMABECHI, Toru)  
一般財団法人人文情報学研究所・仏典写本  
研究部門・主席研究員  
研究者番号：60601860

宮崎 泉 (MIYAZAKI, Izumi)  
京都大学・文学研究科・教授  
研究者番号：40314166

望月 海慧 (MOCHIZUKI, Kaie)  
身延山大学・仏教学部・教授  
研究者番号：70319094

(3) 連携研究者

菊谷 竜太 (KIKUYA, Ryuta)  
京都大学・白眉センター・特定准教授  
研究者番号：50526671

桜井 宗信 (SAKURAI, Munenobu)  
東北大学・文学研究科・教授  
研究者番号：30292171

(4) 研究協力者

本研究の英文マーキングリストには、研究  
代表者・研究分担者・連携研究者・海外研究  
協力者を含めた総勢 27 名が参加している(海  
外研究協力者の氏名等については多数のため割愛)。